

## 【論 文】

# „Stiller“ 考察

村 上 文 彦

## 要 旨

長編小説 „Stiller“ (邦訳:『ぼくはシュティラーではない』)は、1954年、スイス人作家 Max Frischが43歳の時に執筆した彼の最初の長編小説である。以下に記す通り、筆者はこれまでこの作品の成立に至る過程を実証的に研究し、その成果を「総合文化研究」に3回にわたり発表してきた。今回は作品そのものに焦点を当て、そこに内在するいくつかの点を取り上げ詳述し、より深い解釈に至るべく論究した。

## はじめに

Frischがこの作品を完成させてからすでに60余年が経過しているが、示唆に富んだこの作品から今なお学ぶべきことは多い。この作品の執筆によって、翌1955年に作者Frischは当時まだ西ドイツのブラウンシュバイク市から Wilhelm-Raabe賞を授与されたのである。

筆者はこれまでFrischのこの作品に関して「„Stiller“ 生成への過程」〔『総合文化研究』第16巻第1号2010年6月、日本大学商学研究会発行〕、「„Stiller“ 生成への過程：もう一つの成立史」〔『総合文化研究』第17巻第1号2011年6月、同上〕、「„Stiller“ の成立」〔『総合文化研究』第18巻第1号2012年8月、同上〕、さらにこれから派生して「„Max Frischと Peter Suhrkamp“」〔『総合文化研究』第19巻第1・2号合併号2013年12月、同上〕、と題した論文を継続して発表してきた。

本論においては、この作品をさまざまな角度から分析し、とりわけこの作品のどのような点にその普遍性が存するのかを追求し、その価値の高さを検証して行きたい。

## 1 長編小説 „Stiller“ とは

Frischはロックフェラー財団からの奨学金を得て、1951年4月から約1年間アメリカに滞在し、翌1952年5月に故国スイスに帰国した。そしてアメリカ体験を色濃く反映させた長編小説 „Stiller“ は1954年発表されたのである。Frischの代表的な散文作品のなかで、とりわけこの „Stiller“ と „Homo faber“, さらに後の „Montauk“ はアメリカ体験なしにその

成立は考えられない。アメリカは彼の文学の中で大きな比重を占めているのである。

小説 „Stiller“ は、2部で構成されている。第1部は監獄で記述されるStillerの手記で、7冊のノートで構成されており、第2部は検事のあとがきとしてStillerの結婚生活への帰還が描かれている。第1部は全体のほぼ85パーセント強の分量を占めている。

この小説を大きく支えているのは、この小説の主人公でありWhiteと自称しているStillerのチューリヒでの獄中生活、StillerとJulikaの結婚と二人の結婚生活、そして検事Rolfとその妻Sibylleの結婚生活である。

物語は推理小説風に始まっている。つまり、スイスへ旅行したJames Larkin Whiteという名前のアメリカ合衆国のパスポートを持った一人の男が6年前に失踪した彫刻家Anatol Ludwig Stillerに似ているという理由で拘束される。このStillerにはスパイ活動の嫌疑がかかっていたために、その捕らわれた男が身の潔白を証明するために日記を書くことになるのである。同一人物であることを否定するこの主人公はその主張を裏付けるために日記の中にこれまでの彼の人生を書き記すのである。

この小説は „Ich bin nicht Stiller!“<sup>1)</sup>「ぼくはStillerではない」と主張する主人公の言葉で始まっているが、この言葉がすでにこの小説全体を凝縮して的確に言い表している。拘束されたWhiteは、自分はStillerという人物ではない、と頑なに主張する、だが当局は彼が6年前に失踪した彫刻家本人であるに違いないと固く信じている。このために開かれる裁判のために当局がWhiteとStillerが同一人物であることを証明しなければならない間、Whiteは与えられたノートに獄中生活やこれまでの人生を書き記すのである。それは彼自身のStillerとの対決でもある。Stillerなる人物ではないことを証明するために綴る手記には、良くも悪くもスイス描写、さまざまな挿話、アメリカでの体験、弁護士や検事、そして過去に関わった人たちとの再会などが描かれ、物語が展開していくのである。その段々膨れ上がってくる日記は、一方では現在の監獄にいる体験を書き留めたものであり、また彼が看守Knobelに物語る過去のアメリカでの出来事の回顧であり、他方では、他の人たちから彼にもたらされるStillerの人生に関する報告などである。

日記を記述するWhiteはこの小説の語り手の „ich“ である。そして本来の小説の主人公は、Stillerである。WhiteがStillerを知らないと偽るために、彼にとってはStillerを見知らぬ男として、失踪した彫刻家としてその人生を物語られなければならないのであり、それに対して彼は聞いたことを言わば関わりのない者としてその日記に打ち明けるのである。しかし根本的な嘘によって生じるこの奇妙な状況は、一人の人間が自分自身と他の人間について報告し、自分自身を外側から観察することを可能にしているのである。

上述のようにFrischは約1年間のアメリカ滞在を終え、1951年5月にスイスに帰国した。その久しぶりの帰郷の体験が、Stillerが帰郷する冒頭の部分のヒントになった可能性はある。異文化に触れ、精神性が拡大し、過去の自分とは異なる人間となった自分、異文化を知らなかった以前とは違って映る今の祖国、だが凝固したように以前と変わらぬ祖国、それらが彼に „Ich bin nicht Stiller!“ と叫ばせているとも思われる。彼はむしろ „Ich bin nicht Frisch!“ と叫びたかったようにも思えるのである。この異文化とはまぎれもなくアメリカでの体験を指し、この作品を貫いているのがスイスとアメリカの対比である。広大

なアメリカと狭国スイスは地理的状况、精神性、歴史、文化などなどあまりにも異なる点が多い。アメリカ滞在は多感なFrischに影響を与えないで済むはずはなかった。

Stillerが拘束される監獄は、山々に囲まれたスイスを象徴的に比喻していると理解されるのである。彼の目に映るそれは精神的にも物理的にも閉塞感にとらわれた狭国に似ており、そしてその閉じ込められた中で自分自身を執筆することは、スイスの描写と同時に、対極に位置する異郷への憧れ、遠い異国へと漂う精神の描写であり、そこに蘇えてくるのは縛られることのないアメリカでの自由な体験である。スイスが、狭義には彼が拘束されている刑務所が、例えば清潔であればあるほど、憧れる異国は不潔で非衛生的で開放的で奔放である。そこで描かれるその対比は両者の違いを一層明確にしているのである。

Frischはこの小説を通して何を訴えたかったのか、この作品の発表当時すぐにはその意図が伝わりにくかった。„Ich bin nicht Stiller!“ という叫び、これは主人公が本当にStillerという人物なのか、あるいは別人なのかを探ろうとする誤認逮捕を扱った推理小説なのか、„Ich bin nicht Stiller!“ というこの小説の主人公の主張は正しいのか、つまりこの主人公は失踪したStillerであるのか、そうではないのか、何が真実なのか、この物語を読んだ読者たちは作者の真意がすぐには理解できずに当惑した。しかし一読すればすぐ解るように、この小説はストーリーの展開で読者を楽しませる作品ではない。

また例えばHans Meyerは別な観点から「この小説 „Stiller“ を世界的大成果とすることに力を貸した多くの読者が、これは一つの結婚生活物語だと評価したということは、おおいにありうる。結婚生活は夫婦にとって依然として難しい問題なのである」と述べている。<sup>2)</sup>つまり、この小説の中でかなりの部分を占めているStillerと女性との関わりから、これは男女の物語であると解釈された可能性を指摘しているのだ。この長編小説には様々なことが描き出されており、読み方次第ではいかようにも解釈が可能な作品なのである。しかしどのように解釈されようとも、この作品が多くの支持を得たことは、そこに普遍的に共感するものが感じられたからに他ならない。つまりFrischが提示した一人の人間の姿はスイス人のみにかかわるものではなく、国を問わず現代社会のあらゆる場で共通する、人間の苦悩の姿なのである。それゆえに多くの共感を得てこの作品はこれを出版したSuhrkamp社で初のベストセラー作品となったのである。

この物語が発表された当時、Frischの意図を正確に理解するには時間がかかり、さまざまに解釈されたのである。だが、おそらく犯罪物語や夫婦の結婚生活物語という解釈を推し進めるのはこの作品の真の理解につながらないであろう。また仮にこの主人公が主張するように彼はStillerではなく、全く別人のWhiteであるとしたならば、誤解の犠牲者の物語となり、おそらくFrischが意図した物語とはまったく別な意味合いを持つことになるのであろう。Frischが訴えようとしたのは、周囲から押し付けられる役割の拒否であり、自分の意志での自己同一への歩みの重要性なのである。一人の人物の精神的苦悩とその経緯が詳述されているからこそ、この小説の奥行きが深まっているのである。ここで引用されるべきはEduard Stäubleの説である。彼は次のように記述している。つまり、「この小説においても、主観的な現実と客観的な現実の間の緊張感に満ちた心的葛藤が彼を再三再四忙しくさせているのである。つまり、存在する一人の人間と世間に思われている人間との

間の不一致である。内的存在と外的存在の間の食い違いであり、自分自身と同一でない人間の分裂性である・・・」<sup>3)</sup>

ではいったい逮捕された男は、Stillerでなければ誰なのか？この主張„Ich bin nicht Stiller!“とは単に事実を否定しているだけなのか、それともその背後には深い意味が込められているのか、込められているならばどのような主張が含まれているのか、それらの点が明らかにされるべきであろう。そこでこの小説全体を冷静に俯瞰すれば、Frischが意図したのは、人間が存在すべき価値の追求、言い換えれば、Stillerという人間を例にした尊厳の追求である。ここに一人の人物の精神的苦悩とその経緯が詳述されているからこそ、この小説の奥行きが深まっているのである。したがって、さまざまな問題性を内包しているこの小説の中で最も重要な点は何かと言えば、それはStäubleが主張しているように一人の人間の内面の問題であろう。周囲から押し付けられる役割としての人間と、本来あるべき自分という人間の食い違い、それは自分を大切に思えば思うほど、自分をいとおしく思えば思うほど、そして自分に誠実でありたいと願えば願うほど、より一層大きな問題となってくるのである。つまり、本来の自分と周りから押し付けられた役割の衝突、そのギャップこそがこの小説の原動力なのである。Hans Jürg Lüthiは「この小説全体は、物語るIchと小説のIchとの同一の問題を扱っているのである」と明確に指摘している。<sup>4)</sup>

„Ich bin nicht Stiller!“「ぼくはStillerではない！」この絶望的な叫びは、社会から疎外された一人の人間の極限の表現である。この叫びはさまざまに翻訳することができる。例えば„Stiller“という苗字は「静かなる人、沈黙する人」という原意であり、「私は沈黙している男ではないぞ」という解釈も可能であり、また単に「私はStillerという男ではない」とも受け取れる。邦題の『ぼくはStillerではない』は『ぼくはStillerという男ではない』と訳した方がよりStillerの気持ちに近いかもしれない。おそらくこの主人公は、様々な体験を経て自分は生まれ変わったと信ずるがゆえに、過去の自分と現在の自分を同一視されることを拒否し、逃亡するのではなく、もう沈黙してはいないという意味を込めて„Ich bin nicht Stiller“と主張するのである。

Lüthiはさらに「(この小説には) 三つの時間面が生じている。つまりすべてを振り返る囚人としての現在であり、Whiteのアメリカでの過去であり、そしてそれ以前のStillerの過去である。中心部分においては以前の過去は後の過去に追いつくのであり、そしてその両方は現在に採り入れられているのである」<sup>5)</sup>と指摘している。まさにこの三つの時間面が混在してこの小説を強力に推し進めているのである。

同一人物であることを否定するStillerの主張は裁判によって否定され、妻のJulikaの許に戻ることになることで第1部は終了している。そしてそれに続く第2部は検事のあとがきで、その後のStillerの様子が報告されている。法的な判断が下されたStillerはこれ以上同一性を否認することを断念する。彼は自分自身から逃れられないことに最終的に気づくのである。彼に対する告発は取り下げられ、彼は陶工として再び妻Julikaと一緒に暮らす。しかし術後の経過が思わしくなく、Julikaは夫に理解されないまま、夫を理解しないまま、寂しく亡くなってしまふ。残されたStillerはグリオンの地に一人とどまるのである。

## 2 Stillerの逃亡

Jürgen H. Petersenは「この小説の成立史に関して我々は十分なほど情報を得ている。しかし我々は、Frischが用いた素材について、彼が自分自身の体験に立ち戻ったことについてはほんの僅かしか知らない。しかし、自分の体験や経験がこの小説のかなりの部分に入れられているということ、また 一反対に— この小説の多くの個々のものが事実に基づいている、ということを出発点とすることができる……」と述べている。<sup>6)</sup> さらに「小説の中にはたくさん自伝的なことが入っている。„Stiller“ が出版された同年、Frischは彼の家族から別離する決意をする。StillerとJulikaとの間の困難な関係がFrischの結婚生活体験に土台を置いているということ、そして小説執筆の前提となっているスイスからの逃亡は自分の結婚生活となりがしかの関わりがあると考えることは当然憶測される。しかし、たとえ事実が作品に取り入れられているにせよ、それらは変形されていると思われる。その他の点では、ここでの出来事、ストーリー、事件、対話、直面した困難なことなどの由来についてきわめて正確に知ることこそが、この作品のより深い理解に寄与するであろうことは明らかである。そこではそれらは内的な関わりに依存した解釈に至るのである」と述べている。この主張に類似した解釈はしばしばなされている。この小説のそもそもの発端は主人公Stillerのスイスからの逃亡となっている。そこにFrisch個人の問題を見出そうとすることはPetersenが指摘する通り一つの捉え方として確かに意味あるものに相違ない。Frischの実人生ではこの小説に描き出されていることがらと関連するであろうことがしばしば見受けられるのである。例えばStillerの妻Julikaの上品さはFrischの最初の妻Gertrud Anna Constanze von Meyenburgがモデルであろうとの推論はかなり信憑性があるように思われるのである。この件に関してPetersenは、Heinz Ludwig ArnoldがFrischに次のように尋ねたことを引用している。<sup>7)</sup> それによるとFrischは「この小説の中にたくさんの自伝的なことが入っているとお考えになられたらそれは間違いではありません」と述べている。そこでArnoldは「それではJulikaはあなたの最初の奥さんではないのですか」と単刀直入に尋ねている。これに対してFrischは「全く違います。しかし、Stillerとこの女性との不和はいわば自分が体験した不和なのです」と答えている。小説に描かれた不和は現実の妻との不和ではないが、それは自分が体験した不和である、これは奇妙な答えに感じられる。当時Frischにはまだ一般に知られていなかった女性たちとのかかわりがあったのである。Frischは自分の死後20年間は残された資料を公開することを禁じていた。そしてその年月が過ぎ、徐々に明るみに出されてきたものから、その当時を推測させる新たな資料の存在も次第に判ってきた。つまり、まだすべての資料が出揃ったかどうか不明の段階であり、彼の実生活と作品を結び付けて解釈するのはまだ危険性があるのである。したがって、ここでは誤った解釈に至らないようにするために作品そのものの解釈に限定して論を進めるのである。

Frischはこの作品でStillerという男の人生を提示した。人生ほどさまざまな可能性があり、無限なものはない。そこには定まった答えもなく、ましてや正解もない、あるのは個々の生き様であろう。Frischはそもそもの前提となるそれぞれの人生についてこの作品の中

で次のように記している。

「我々が人生をどう理解しているか、すべてはそれ次第だ。本当の人生、生きた何ものかの中に沈殿している人生、ただ単に変色したアルバムの中にあるのではない人生、それは、なにも立派な、歴史的な、忘れがたいとは限らない人生……本当の人生とは、それはごくひっそりとした、ひとりの母親の人生かもしれない、あるいは、世界史に残るような偉大な思想家の人生がそうであるかもしれない。しかしともかく、本当の人生というものは、われわれの社会的な重要さによるものではない……一つの人生が本当の人生であったということは、それは言い難いが、大切なのはそのことだけだ……ある人間がその自己と同一するのだ、とも言えるだろう。そうでなければ彼は存在したことになるのだ。」<sup>8)</sup>

Stillerは、自分自身の過去や、結婚生活や、友人たちや、そして故郷など、まさに自分を取り巻いていたあらゆる不一致から彼自身を解放するため、突然として逃げ出したのである。そして、獄中での日記の中に描かれているのは、彼が背後に置いてきた人たちとの再会、彼が逃亡している時に体験した様々なことへの追憶などであり、それらはしばしば冗談や作り話で縁飾りされ、カムフラージュされている。自分自身との同一に至るための道程には彼を待ち受けている様々なものたちがある。かつて彼に対して抱かれていた、死んでしまった嫌悪すべき像に対する更新された防御、不全であった以前の人生との避けられない合体、そして結局、最終的な荒々しい反抗、新たに更新されたと思う本当の自分自身を誰にも承服されないという助けのない苦しみなどがその先には待ち構えているのである。

なぜStillerは逃亡したのか、Frischはこの作品の中でその必然的理由を記している。それらを拾い集めてみると、すでにStillerの手記の最初のノートの中に、「わが不安：繰り返し！」<sup>9)</sup>という言葉が認められるのである。すぐそのあと、Stillerはそれをより詳しく、次のように補っている。つまり、「繰り返し！ 自己の人生に繰り返し以外を期待するのではなく、それも逃亡のない繰り返しを、自由意思で（強制されてではなく）自分の人生とすること、『これが私だ！』と承認することによって、万事はそのことに成功するかどうかにかかっているのを僕は知っている。……。だが再三再四、またしても（そのことの中にも繰り返しがあるわけだが）一つの言葉、僕を驚かす一つの表情、僕が思い出す一つの景色、そして僕のうちにあるすべてのものが、逃亡の誘因となる、どこへ行くか希望のない逃亡の誘因となるのだ。ただ単に繰り返しへの不安から —」<sup>10)</sup>

多くの人が不満や、疑問を抱えながらも、日々の生活の忙しさに紛れ、自分の人生をいとおしいと思いつつも繰り返ししている日々、それをStillerは黙過することができなかつたのである。彼は夢の中でさえ自分の軍隊時代の苦い思い出に苛まれる。中隊が行進するときただ一人歩調を合わせない者がいる。それが上官をイライラさせ、金切り声をあげさせる。その一人が自分であり、またそれに気づいていない自分、他の人と同じではない自分に夢の中でも追い詰められるのである。<sup>11)</sup>人間は同じでなければならないのか、真実ではないと思うことにも沈黙していなければならないのか。

同じことを繰り返す日々、精神的にも行動においても同じことが繰り返される日々は退

屈で発展性もなく、充実感もない。その繰り返しを自分の人生として認めるのもあろうし、それが否定されるものでもない。しかしそのような状態を忌避し、自分の人生により充実したものを求めるとすれば、何らかの形でその膠着状態を打破しなければならない。そこに見出せる方法の一つがStillerの場合は現実からの逃亡であったのである。いかにも無責任とも思えるその行動、しかしここでその是非を問うのは適正ではない。提示された一つの人生をどのように吟味し、冷静に判断するのが研究者の使命であろう。

Stillerに加味された逃亡への要因は、繰り返しへの嫌悪ばかりではなく、祖国への拒否感と遠い異国への憧憬、山々に行く手を阻まれる祖国の狭さ、確立した道德観、隅々にまで及んでいる管理、固定される人間関係、倫理観や常識、偏狭なものの見方などが現実生活の背後にしっかりと根ざしていることなどである。その中に幾重にも縛り付けられている個々の生活、それらが相まって、感じやすい一人の小心な男を追い詰め、逃亡へと至らしめていくことになるのである。

Walter Schmitzはこの作品執筆当時のFrischについて、「スイスの狭さと小ささについての当時の彼の文章を信じるのが許されるなら、彼は故郷に本当に嫌気がさしていた」と記している。<sup>12)</sup> この解釈が正しければ、二つの人物像が重なり合い、「StillerとWhite」は「StillerとFrisch」と言い換えることができるかもしれない。そして祖国と異国の対比が小説の中で様々にちりばめられている。

Stillerの逃亡へと至る絶望感を増幅する要因として、バレリーナである妻Julikaとの出会い、夫婦の諍い、Julikaの肺結核、二人に生じる疎遠感、検事の妻SibylleとのStillerの裏切りなどがノートの中で綿々と述べられる。さらにスペイン市民戦争での義勇兵としてのStillerの無能さなども描かれている。これらの現実生活の様々な壁が自己に誠実であろうとするStillerを妨げる。彼はそれまでの自己を嫌悪し、もはやStillerとしての役割を演じようとは思わないのである。押し付けられる役割から逃れる方法、そこでStillerが選択した方法はスイスからの逃亡である。押し付けられた役割を受け入れこれまで通りの生活をし続けるのか、あるいは押し付けられた役割を拒否し自分に忠実に生きるのか、Stillerはこの後者を選び、アメリカへと逃亡したのである。

改善の見込みのない現実からの逃亡、遠くへの憧れはStiller個人の特殊な思いではなく、誰にも芽生えうるものである。刑務所に収監されている未決囚の一人にStillerは自分と同類の男を見出すのである。そこに「孤独なまなごしを近くの煉瓦の壁に向けた、遙かなるところへのあこがれの表情、自分はここにいるべきではないとはにかんだような」姿を見てStillerはその思いの共通性を感じるのである。<sup>13)</sup>

逃亡の要因は万人に潜んでいる。Frischはさまざまな挿話をこの小説の中に取り入れているが、ここで触れられるべきは4番目のノートに描かれた肉色の服地の話である。普段は収監者Stillerと極めて冷静に接する検事Rolfが現実生活から逃避し、まるで『逃亡者』<sup>14)</sup>のように夜行列車に乗り込み、ジェノヴァへと行きついたのである。そこで彼は心ならずも肉色の服地を手にしてしまうのである。ここでRolfが何としてでも処分しようとしたその肉色の服地は彼の手を離れようとはしない。捨てようと思っても捨てられず、いつまでも付きまとってくるのである。彼はそれを手放そうと試みるがもどかしいほどに思い通り

にはならないのである。そもそも肉色 „fleischfarben“ という表現は布地の色を表現するのに適切であるのかどうかは不明であるが、これは肌の色を意味していると思われる。つまりこの世に生まれたときに決定づけられた個々が背負う肌の色は簡単に手放せるものではないというFrisch流のたとえ話と受け止めるべきであろう。いかに祖国や同胞を嫌悪しようとも肌の色で象徴される自分の運命は容易に放棄できるものではないという示唆と解すべきである。<sup>15)</sup> つまりこれはスイス人だからということではなく、どの国、どの人種に生まれようとも共通する人間としての、いわば宿命を象徴的に描いた挿話として普遍性を持つのである。

Frischは、2番目のノートの中でStillerの妻Julikaの場合でも類似した状況を提示している。つまり、Julikaは成功したバレリーナだが健康上の問題を抱えていた。肺結核が、とりわけ左側の肺が彼女の体を蝕んでいたのである。彼女は医者 の指示でダボスでの療養を強いられたのである。サナトリウムで治療を受けている間、静かな日々の中で一人の若いサナトリウムのベテランが彼女に親切に接してくれたのである。このベテランは「ここではだれかが死んでも驚かない。感銘を与えようと思って死ぬ人はまったく無駄死にだ。ここでは感銘を与えるのは生きていることだけだ」とJulikaに語るのである。生と死、それは隣接している。生きざまにもがくのは生きている間だけで、それが終われば死が訪れる。誰しも逃れられない死が例外なく訪れるのである。したがって、時間の経緯は死が近づくことであり、緩やかな恐怖を意味する。しかし永遠に生き続けることはあり得ないのだから、せめて生きている間は自己に忠実にありたいというのがこの小説の根本的テーマなのである。この普遍的な死と生の隣在もまた、それぞれに限定的に与えられた時間である人生の扱いを疎かにさせないのである。

この陽気で話好きのサナトリウムのベテランは九月の終わりに死んだのである。この若い男はいつもJulikaのベッドに腰掛け、気の利いた、はしゃいだ感じで、明るく話をしていたが、前触れもなく死が不意に訪れたのである。自分の人生から逃れることはできなかったのである。隣室ができるだけひっそりと片づけられたとき、彼女はその事実をただただ信じられなかった。Julikaは親切そうに睡眠薬を渡されたが、吐き出した。Julikaはすっかり度を失った。こんなにもさりげなく、そっとした、急激な死の訪れに驚愕した。そしてサナトリウムでは死んでしまった人のことは誰も何も言わない。数日後、静かなベランダにいた彼女の耳に聞こえてきたのは隣室からの乾いた咳音だった。それはあのベテランではなく、次の入院患者の咳音だったのである。彼女はぞっとした恐怖を感じたのである。一人の人間がその勤めを終え、この世を去ってしまっても、何も変わらぬように過ぎていく日々、突然として消滅してしまう生命、その恐ろしさに、Julikaがサナトリウムからの逃亡を試みるまでに時間はかからなかった。逃亡、さまざまな要因による逃亡、無数にある逃亡の形態、しかしここに描き出されている逃亡は押しなべて希望のない逃亡、絶望ゆえの逃亡、どこへ行くかもわからない逃亡、計画性のないものばかりである。そもそも自己の人生からの逃亡は可能なのか。3時間後、Julikaは救急車で運ばれてサナトリウムに連れ戻され、再び白いベッドに横たわっているのである。彼女の逃亡の試みは終焉し、再び自分の人生に引き戻されたのである。

宿命的に与えられた人生、それぞれが生まれた時から背負わなければならない運命、それをFrischは3番目のノートの中でとあるゴスペル教会で見かけた一人の褐色の女性で描いている。その部分をここに引用してみよう。

「・・・私はちょうど褐色の、かなり明るくそしてとても美しい娘の首筋が見えた。その首筋にはたくさんの白粉が塗ってあった。ああ、白くありたいというこの憧れ、そして縮れていない髪の毛になりたいというこの憧れ、創られたものとは違う者でありたいというこの生涯にわたる努力、自分自身を受け入れることの途方もない難しさ、私にはそれがよくわかった。自分の苦しみを外から見る想いだったのだ。あるがまま以外の他の者になろうとする我々のあこがれの不条理さを見た！」<sup>16)</sup>

さりげなく挿入されているこの褐色の娘の話も類似した印象を与えるのである。だが、おそらくこの娘は逃亡を図ることはない。しかしその胸には自分を是認する難しさと他者への憧憬が潜在的に混在している。そしてそれはいつか自分自身を受け入れる日が訪れるとき深い思い出として残るか、忘却の彼方に去るのである。

Stillerは5番目のノートの中で、「逃亡はありえない」と記しているのである。<sup>17)</sup> 多くの人たちが様々に試みる逃亡、そしてその逃亡があり得ないならば、自分の人生に引き戻されるのならば、立ち向かわなければならないのがまた人生であろう。Stiller自身の人生も例外ではない。彼は、とりわけあのカールズバッドの暗い洞窟の中で自分自身の人生に激しく立ち向かうことになるのである。

### 3 Stillerの帰還

Stillerが姿をくらまし、6年の歳月が流れ、かつてStillerの周りにいた人々も6歳年を重ね、それぞれの人生を歩み、生活を営んでいる。Stillerは、自分に与えられたこのたった一つの人生から逃れることはできない、あるいはそもそも他の人生をもつことなどできない、という認識に至り帰ってくる。そして収監された独房で自分自身に次のように言い聞かせるのである。

「逃亡はあり得ないのだ。僕はそのことを知っているし、毎日自分に言い聞かせている。逃亡はあり得ないのだ。僕は殺人を犯さぬために逃げたが、まさに逃げ去るという試みが殺人であることを知った。今やたった一つのことしかない。つまりこの意識をわが身で心得ることだ、例え僕は一つの生命を殺してしまったのだというこの意識を僕と分け合う人が誰もいないにしても。」<sup>18)</sup>

ここで一つの生命とはStiller自身の生命ではなく、その妻Julikaの生命と解釈されるべきであろう。肺結核に苦しむ妻をダボスのサナトリウムに置き去りにした許されざるべき行為を指しているであろう。

逃亡したから別な人間になれるということはあり得ない。逃亡に至る要因はすべてが外的なものばかりではなく、自分自身によるものもかなりの程度含まれるのである。

自分の人生からの逃亡は不可能なのだ、そのことを認識するまでにStillerには紆余曲折があった。そして到達したのは一人の人生の長い道のりへの帰還である。他人に成りす

ましたり、ほかの人間に入れ替わったりすることなどはできない。人生は逃亡では何も解決しない。結局自分の人生に舞い戻る、それしか道はないとStillerは知ったのである。そこでStillerは、現在の自分がかつての自分ではない、ということを確認させようとしてWhiteと自称し続けたのである。そしてかつての自分とは違う人間として、外国人として、外国人の名前で、彼はスイスへ舞い戻るのである。

Stillerはスイスへ戻り、スイスのどこへ行こうとしていたのかは全く触れられていない。彼の主張によれば、メキシコのベラクルスから船でフランスのル・アーブルに着き、そこから列車でスイスに来たのである。小説にはその先の予定は全く触れられていない。彼の乗っていた列車はチューリヒに着いたが、そこで下車することにもなっていない。彼が乗っていた列車の行き先も示されていない。つまり、小説 „Stiller“ においては彼がスイスに帰還することだけが重要で、いったいどこに行こうとしていたのかなどはこの小説を理解するうえでは全く不必要とされているのである。

そもそもStillerはスイスを逃れアメリカへと逃亡したが、その逃亡は自ら破壊してしまった夫婦関係、女性との関わり、友人たちの彼に対する評価への不満と拒否、行き詰った仕事などの蓄積の果てであり、6年後にスイスへ帰還して列車で相席した乗客に見破られ警察に保護されるというあらましが、6年後に帰還して別人を装うという設定はやや不自然で強引な印象を受ける可能性がある。Stillerの外見はそれほどの変化をきたしていないのである。妻のJulikaは「あなたが禿げるだなんて思いもしなかったけど、それも悪くないわね」と言い、<sup>19)</sup> 彼自身も「失踪したStillerと僕の中に類似性があるのを否定する気はない」と言っているのである。<sup>20)</sup> 妻はまた「あなたはかなり痩せたわね」と彼の全体像を評している。<sup>21)</sup> その程度の外面的な変化とされている。これらは、かつての彼を知っている人ならばほとんど彼を見間違えることはない程度の変化にすぎないのである。

他人を装っている彼を見て「Stiller、あなたは何ということをやっているの！」<sup>22)</sup> と驚かれ、あるいは叱責されるか、失笑される類である。知人ならばほとんど直感的に見破られるであろう。しかし当の本人が大真面目にそれをやり続ければ、その行為を頭から否定するだけでは済まなくなる。身分を証明するものが何もなければ、Whiteと称する者がStillerであると法的に証明するには様々な証拠資料が必要となるのである。実際には、一人の男が妻の前で、かつての愛人の前で、かつての知り合いの前で他人を装ったとしても、まずは姿かたち、身体的特徴、身長、言葉遣い、言葉のイントネーション、声の質、声の大きさ、声の高さ、話す速度、話し方、仕草、体臭、ため息のつき方、話す内容などなど、一人の人間を特徴づけるものは限りなく存在するだろう。

「お聞きしたところでは、あなたはドイツ語を話されるのですね」「わたしはドイツ系です、ドイツ系アメリカ人です」<sup>23)</sup> とFrischは補っているが、スイスドイツ語は独特の発音で、„r“ の音を聞いただけでもスイス訛りを聞き分けられる。一概にドイツ人と言ってもそれぞれの地方で発音や言い回しの違い、地方特有な表現方法などがあり、出身地のおおよその見当は付くと思われる。ドイツ人同士でも出身地が違えばお互いがそれぞれの方言で話したら理解しにくいほどであり、„hochdeutsch“ と言われる標準のドイツ語を話したとしてもスイス人であることはすぐに見抜かれるであろう。ましてそれが長年一緒に暮ら

した妻や、かつての親しかった人などと対面させられれば、即座に見破られる。音声に関わる点以外にも、本人と確認する術は様々に考えられる。さらに顔かたち、顔の動き、表情、細かい癖、などなども考えられる。それゆえに、昔から知った身内の人間の前で他人を装うことはいかに不自然である。いかに他人を装うとも、以前から近い人間がみれば、同一人物であることを見破るのは容易なことと思われる。それでもなおその人の前で他人を装い続けるというのは、陳腐な設定のようにも思える。しかしここで重要なのは偽装の巧拙ではない。この小説が支持されたのは、他人を装う精神的経緯に普遍性が存したからであろう。真の自分とは違う人間を装う姿をFrischは „Mein Name sei Gantenbein“ でも描き出している。

6年という時間の経過は外面的に大きな変化がない以上別人を装うには短すぎる。しかしこの6年という時間は、かなり苦労した設定であると推測される。もちろんこれ以上に短い時間の設定では他人を装うにはあまりにも経過時間が短すぎ、滑稽な喜劇に陥ってしまう。しかし重要なのは、偽装することによどのような意味があるのか、なぜ偽装せざるを得なかったのかという点にある。つまり、現在のStillerを見て何とバカなことをやっていると思うまさにその人たちに、以前と違う自分を示すために他人を装う行為をStillerは行っているのである。昔のままの自分とと思っている人たちに変身した自分を示そうと試みているのである。自分が持つ他の可能性を示し、認識させたいという思いの行動なのである。

そしてStillerが帰還するのがなぜ6年後なのかという点も触れられなければならないであろう。それは失踪以前の彼を知っている人たちが6年後の彼に会うという絶対条件を満たさなければならないからである。単に6年の失踪の後にスイスに帰還して見知らぬ誰かと会ってもそこには失踪の意義が生じてこない。Frischがそこに描いたのは人間の可能性であり、一人の人間に刻まれた像を固定してしまう罪だからである。与えられた役割の拒否であり、固定されることの拒否である。以前のStillerを知っていればこそ、そこに初めて現在の彼との違いが認識可能となるのであり、現在の彼しか知らなければ単に現在の彼を認識するだけで、そこに変化の可能性を感じることはならないのである。したがって、以前のStillerを知っている人たちが存命していて、Stillerの変化を感じることができる人たちとStillerを引き合わせることで最短の時間が6年としたと解釈するべきである。そして彼の妻をはじめとしてすべての人たちは彼を再び認識するのである。だがなぜ彼が同一人物であることを認めようとするのかは理解されず、そこに生じる食い違いがこの小説を推し進めている。

„Ich bin nicht ihr Stiller.“ 「僕は彼らの思っているStillerじゃない」<sup>24)</sup> という一文は、周囲に理解してもらえない苦悩、思いが伝わらない歯がゆさ、もどかしさ、じれったさ、Stillerの絶望的な悲鳴と解するべきである。補って考えるならば、本来この文は、„Ich bin Stiller, aber...“ 「僕はStillerだ、だけど・・・」とあるべきで、この一文からだけでも彼が同一人物であることを認めていると推論することが可能なのである。精神的な意味に限定すれば過去の自分を否定することは許容されるであろう。またこの小説の範囲に限定すれば別人であると主張することも罪とは言えない。その微妙な領域で自分を問い詰めた一つの姿がここに描かれたStillerであると言えよう。彼は自分がStillerであると認めさえ

すれば拘束を解かれ再び自由の身になれるのである。しかし彼はそれを認めようとはしない。その理由は次のように記されている。

「それは僕が事実に対する言葉をもっていないということだ。安ベッドに横たわり、何時間も眠れずに、自分がすべきことを考えようと試みている。僕は降伏すべきなのか。嘘なら容易くつける。たった一言、いわゆる自白だ。そしたら僕は自由だ。それは僕の場合忌々しいことに僕と全くかかわりのない一つの役を演じるということだ。」<sup>25)</sup>

自分はStillerではない、ならばいったい誰なのか、自分はいったい誰なのか、という問いかけが問題なのだ。自己を証明すべきパスポートが偽物、ではいったい自分が何者であるかをどのように証明できるのか。自分を一つの役割にはめ込もうとする人たちにそうではないと納得させるべき方法は結局手記を綴ることなのである。Stillerの場合は身分を証明する客観的な材料を用意することではなく、ノートに手記して彼の内面的な問題を詳細に示すことがより重要なのである。自分が納得して自分を受け入れられるようになることである。そして彼が綴るその手記に認められたのが4つの殺人である。Stillerの前歴を知らない看守Knobel、つまり読者にStillerの精神的な遍歴を知らしめ、より説得力を付加するために、可能な限り非スイス的な、法外な挿話をちりばめているのである。それが4つの殺人事件である。とりわけ洞窟での二人の男の戦いの物語について、Knobelに話して聞かせる話が必要だった、とFrischが語っていたことをWalter Schmitzは紹介している。<sup>26)</sup>

Stillerは物語のかなり早い段階で、つまり1番目のノートの中で薬剤師Isidorの話を紹介している。逃亡のやむを得なさをIsidorの話を用いることで補強しているのである。

Isidorというこの男は、どこに行っていたのと妻から絶えず尋ねられるのが我慢できなかった。それを尋ねられると彼は怒った、内心怒ったが、うわべは何も気づかせなかった。彼らはある夏に当時流行っていたマヨルカ島への旅行を計画した。マヨルカ島行きの汽船にすでに乗船していた妻を少し怒らせたが、Isidorは最後の瞬間に新聞を買いに行かなければならなかった。どこに行くの、という妻の質問に対する純粋な反抗心からそうしたと言えるかもしれない。結局彼はそのまま戻らず、フランスの外人部隊に入り、7年後に家に戻った。ほとんど泣き出さんばかりの妻が、「そんなに長い間どこに行っていたの」と尋ねた時帰郷は終わった。さらに1年後、妻の誕生日にIsidorは戻ってきた。しかし、妻が「今度はいったいどこに行ってたの」と聞いたとき、Isidorは立ち上がって出て行った。そうして二度と戻ってくることはなかった。<sup>27)</sup>

この短い挿話はStillerの失踪と同じ意味を持っているのではない。だが、Stillerを囲んでいた人たちと、Isidorの妻には共通の側面が見られるのである。それは、失踪する前も帰還した後も、一度刻んでしまった像をそのまま適用している点である。Stillerが内面に秘めていた思いや、変化した点をなかなか認識しない周囲と、夫が秘めていた可能性やその後の変化を認識せず、変わらぬ接し方をした妻である。StillerもIsidorも双方共に、受け入れられることを望んでいるのである。それが伝わらないゆえに、Stillerは失踪し、帰郷した後は他人を装い、Isidorは船に戻らず、帰郷しても再び出ていってしまうのである。

## 4 結び

Stillerの様々な内なる苦悩を描き出したこの小説 „Stiller“ は法的にWhiteと同一人物であると判断が下され、それをStillerが受け入れた形で決着が図られている。そして判決後の彼と妻Julikaとの二人だけの生活と、その後のJulikaの死、そして一人残されたStillerが検事のあとがきで報告されている。この小説の大部分を占める第1部でのStillerの主張と第2部の一人残されたStillerを比較すると、作者Frischの意図がほの見えてくるかもしれない。そこには押し付けられた像の拒否、逃亡、帰還、裁判、判決の受け入れ、妻の死、残された孤独の生活、これらが凝縮されているのである。一人残されたStillerはもはや逃亡することも、自己を装う必要も全く無用となり、もはや無意味である。精神的な激動の時期は過ぎたのである。つまり、周りに彼を評価し判断する人達がいればこそその逃亡であり、帰還であった。ではFrischはその人間関係を描こうとしたのか、いやそうではない。彼が最も訴えたかったことは、無為に送る人生の虚しさであろう。この世に生を受けたならば、その人生を意味のあるものにしたい、生きる手ごたえを感じるべきだ、ということに他ならない。Stillerの行動にはそういった普遍性が秘められているのである。それがStiller個人にだけ関わるものならば、この作品がそれほどまでに支持されることにはならない。人間の生きるべき意味を理解するヒントがこの作品には多く含まれている。Stillerが抱える疑問、感じる不都合、その行動などに共感を覚えるからこそこの作品は高い評価を受けていると判断できるのである。この作品が発表されてから60余年を経た今でもMax Frischの描いた小説 „Stiller“ は読む人達にそれぞれの人生への新たな刺激を与え続けてくれているのである。

---

### [注]

- 1) S.361.
- 2) Meyer : S.71.
- 3) Stäubli : S.163f.
- 4) Lüthi : S.60f.
- 5) Lüthi : ebd.
- 6) Ebd.
- 7) Petersen : S.25. „Gespräch mit Max Frisch“. in: Heinz Ludwig Arnold: Gespräche mit Max Frisch. In: H.L.A.: Schriftsteller im Gespräch. Bd. I, Zürich, 1990.
- 8) S.417f.
- 9) S.420.
- 10) S.421f.
- 11) S.523f.
- 12) Schmitz : S.11f.
- 13) S.372.

- 14) S.551.
- 15) S.551 bis 582.
- 16) S.542.
- 17) S.589.
- 18) S.412.
- 19) S.411.
- 20) S.417.
- 21) S.523.
- 22) S.599.
- 23) S.363f.
- 24) S.401.
- 25) S.435f.
- 26) Schmitz : S.31.
- 27) S.393f.

#### [参考文献]

- Max Frisch : Gesammelte Werke in zeitlicher Folge, Sechs Bände, hrsg. von Hans Meyer unter Mitwirkung von Walter Schmitz. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, Erste Auflage.1976.
- Jim White : Jim White's Own Story, The Discovery and History of Carlsbad Caverns. Bienek, Horst : Werkstattgespräche mit Schriftstellern. dtv 291, Carl Hanser Verlag, München, 1962.
- Hage, Volker : Max Frisch. rororo 321. 9. Auflage, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1993.
- Kilcher, Andreas : Die Abenteuer des Cowboys Jim White. in: Neue Züricher Zeitung, 29.12.2011.
- Lüthi, Hans Jürg : Max Frisch. UTB1085. A. Francke Verlag GmbH München, 1981.
- Mayer, Hans : Über Friedlich Dürrenmatt und Max Frisch, Verlag Günter Neske Pfullingen, 1977.
- Petersen, Jürgen H : Max Frisch Stiller, Verlag Moritz Diesterweg GmbH & Co., Frankfurt am Main, 1994.
- Petersen, Klaus - Dietrich: Max Frisch – Bibliographie. In; Über Max Frisch, hrsg. von Thomas Beckermann, editon Suhrkamp, 5. Auflage, Frankfurt am Main, 1974.
- Schütt, Julian : Max Frisch Jetzt ist Sehenszeit Briefe, Notate, Dokumente 1943-1963. hrsg. von Julian Schütt. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1998.
- Schütt, Julian : Max Frisch. Erste Auflage, Suhrkamp Verlag, Berlin, 2011.
- Stäubli, Eduard : Max Frisch. Vierte, unveränderte Auflage, Erker-Verlag, St. Gallen, 1971.
- Waleczek, Lioba : Max Frisch, dtv 31045. Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH &

Co.KG,München, 2001.

Walter Schmitz : Zur Entstehung von Max Frischs Roman »Stiller«. In : Materialien zu Max Frisch „Stiller“. Erster Band, hrsg. von Walter Schmitz, Suhrkamp-taschenbuch 419, Frankfurt am Main, 1978.

### (Abstract)

Im Jahr 1954 wurde der Roman „Stiller“ von dem schweizerischen Schriftsteller Max Frisch geschrieben. Damals war er noch 43 Jahre alt. Der Roman soll hier ausführlich betrachtet werden.

